

せめぎ合う霊力：ケニア海岸地方ドゥルマにおける キリスト教徒達の語り

岡本，圭史

<https://hdl.handle.net/2324/1806793>

出版情報：九州大学，2016，博士（人間環境学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	岡本 圭史		
論文名	せめぎ合う霊力——ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教徒達の語り		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 瀧本 満
	副査	九州大学	教授 坂元 一光
	副査	九州大学	准教授 飯嶋 秀治
	副査	九州大学	准教授 佐々木 玲仁

論文審査の結果の要旨

岡本圭史氏の学位（甲）請求論文『せめぎ合う霊力——ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教徒達の語り』はケニア共和国コーストプロヴィンスのドゥルマ社会における通算 12 ヶ月に及ぶ長期の民族誌的フィールドワークに基づき、当該社会で 1990 年代にはいって急速に進んだキリスト教化の文化的背景をあきらかにしようとした意欲的な作品である。

本論文において著者は、調査地の非キリスト教徒とキリスト教徒のそれぞれの語りを丁寧に紹介し、両者を対峙させることによって、今日のドゥルマ社会において両者が、妖術使いや憑依霊といった危険な霊的な力が実在するという世界経験を共有していることをあきらかにしている。

第一章、第二章においては妬み深い隣人による隠れた攻撃である妖術が、非キリスト教徒、キリスト教徒を問わずこの地域の人々の日常生活において、真剣に対処せねばならない憂慮すべき実在する危険であることが、人々の語りと丹念な事例紹介を通じて描き出されている。植民地期を通じて、ミッションによるキリスト教布教は、妖術のような霊的な危険を一貫して「未開民特有の迷信」とみなし、まともに相手にしてこなかった。それに対して、著者は、近年のキリスト教が、こうした霊的な諸力に対抗する新しい強力な方途としてとらえられている可能性に注目する。もしドゥルマ社会の近年の急速なキリスト教化が、こうした霊的な諸力に対する対抗策を求めてのものであるとするなら、「改宗」という概念そのものをより広いものにとらえなおす必要がある。

第三章においてはこうした観点から、著者は既存の宗教概念や改宗概念に批判的な検討を加えている。宗教を世界観や信念体系、ものの考え方といった認識の側においてとらえ、改宗を一つの信念体系を、別の信念体系に置き換えるような過程としてとらえる既存の概念枠組みが、きわめて西洋近代的な限定的なものであると指摘し、ドゥルマの妖術をめぐる観念体系を「伝統宗教」としてキリスト教に対置させる見方を退ける。

第四章では、調査地の村におけるペンテコステ派教会の活動や、そこでの人々の実践や語りに分析の焦点を置き、教会が妖術や憑依霊を対処すべき現実的な問題としてとらえていることがあきらかにされる。そこではキリスト教の祈りは、それらに対する有効な対抗手段として、非信徒にとっての施術（呪術的対抗手段）に近い位置を占めているのである。アフリカの他地域においても指摘されているように、ここでも妖術問題に対するキリスト教自身の変容が、キリスト教の急速な受容の大きな要因となっている。

しかしこれは単にキリスト教が現地の文化に取り込まれた、あるいは現地の文化に合わせて変容したということの意味するわけではない。ドゥルマ社会においてキリスト教徒になることが、妖術や憑依霊の脅威に立ち向かう手段だという点を指摘することで、著者は、改宗を宗教的信念の受容と同

一視することを回避できるとする一方、そこに宗教的信念の受容や自己変容がまったくないわけではないことも、人々の語りの詳細な分析を通して指摘している。「改宗」は、単なる信念体系の受容にも単なる功利主義的な動機にも還元できない、複合的な相をもったプロセスだと著者は主張する。同様にそれは既存の文化的観念自体にも大きな変容をもたらさうる。

続く第五章、第六章においてはキリスト教徒の語りのなかで、既存の妖術観念や、憑依霊観念自体が重要な変化を被っていることが示される。妖術観念は、キリスト教徒の語りのなかで、教会の活動を妨害する偽のキリスト教徒としての悪魔崇拝者と重なり合い、キリスト教の内部の敵として肥大化しつつある。また非信徒たちにとっては脅威であると同時に守護者ともなり得る両義的な存在として語られる憑依霊は、キリスト教徒の語りの中では、その両義性を失い、もっぱら有害なだけの神の敵とされる。さらに第七章においては、こうした霊的諸力を巡る文化図式の変容が、ドゥルマ社会をとりまく社会的諸事象—NGO や外部起源の富など—をめぐる想像力に及んでいることが示される。

最後に結論において、著者は改宗過程の研究をめぐる方法論上の問題を検討し、それを複合的、多面的な文化現象として捉えるべきであると論じている。

以上のように、本論文は長期の民族誌的調査の実証的な詳細なデータに基づき、キリスト教受容という現象を、複雑な文化的プロセスとして分析する、ニュアンスに富んだ深い洞察を示しており、博士（人間環境学）の学位に値するものであると認められる。